

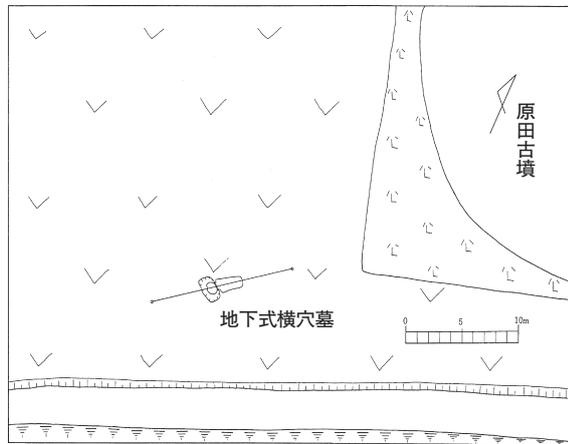
(曾於郡有明町原田大塚)

位置と環境

原田古墳群は、役場のある中心部から南西に約3kmの畑地内で、標高約57mの台地縁辺に所在する。台地の西側には志布志湾へ流入する田原川が位置している。

調査の経緯

この地には古くより知られている原田古墳（第1図）と昭和54年に大隅地区埋蔵文化財分布調査の一環で発見・調査された原田地下式横穴墓（第2図）がある。原田古墳は径40m・高さ15mの大型の円墳で、発掘調査は実施されておらず埋葬主体その他に

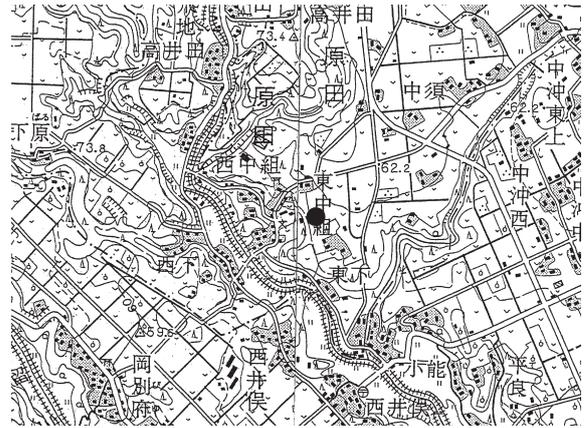


第2図 原田古墳・原田地下式横穴墓

ついては明らかではない。

遺構と遺物（第3図）

原田地下式横穴墓は、昭和54年11月に土地所有者が貯蔵用のイモ穴を掘っている際に、地下に空洞（玄室）ができて発見されたものである。この地下式横穴墓は、原田古墳の南西に位置し墳裾から22m離れている畑地内にある。主軸が北東～南西方向で縦穴部が南西部、玄室部が北東部にあり、玄室が原田古墳の中心部へ向っているという特徴を備えている。全長は3.9m、縦穴部は2.1×1.4mの長方形で深さ1.1mを測る。羨道部は幅0.6m、高さ0.6m、長さ0.5mで玄室への入り口は玄室の短辺に位置するいわゆる妻入型である。羨道部から玄室への入り口の閉塞の痕跡は認められないが、玄室内への流入土が



第1図 原田古墳群の位置

極めて少ないことから木製の板によるものと思われる。玄室は幅1.3m～0.9m、長さ2.2mの略長方形で、高さ0.7mを測り内部は家形を呈する。玄室内には幅0.5m、長さ1.4m、高さ0.35mの軽石製組合せ石棺が納められている。石棺は蓋石が5枚、側壁は10枚と9枚、小口にはそれぞれ1枚ずつの計26枚の軽石板が使用してある。石棺の底には軽石の削り屑が多量敷き詰められ屍床面をなしている。

埋葬されていた人骨は、良好な保存状態ではなかったが腓骨・肋骨・大腿骨・骨盤・上腕骨・前腕骨・脊柱等が残っていた。人骨の残存状態から伸展葬と思われる、鑑定の結果は成人女性である。

副葬品は刀子（第4図）が1点だけで、全長7.9cm、茎長2.6cm、茎幅は背部で0.03cm、刃部で0.02cmを測り刃区を有するやや小さめのものである。

原田地下式横穴墓は、玄室が長方形プランの家形をなし、羨道部の取付けが妻入りであることから古式のタイプの地下式横穴墓であると思われる。また、軽石製組合せ石棺を有しており、志布志湾沿岸の地下式横穴墓の特徴を備えているもので、6世紀前半頃のものと考えられる。

特徴

原田古墳群の特徴としては、地下式横穴墓の主軸が円墳である原田古墳の中心部へ向っていること、また、通常は縦穴部の方に位置する頭部の位置が、円墳の方（玄室の奥部）に位置することである。このことは、高塚古墳と地下式横穴墓が密接な関係にあることを意味するものであろう。

また、古式で軽石製組合せ石棺を有する単葬の埋

葬方法を用いる地下式横穴墓の中に成人女性が葬られていたことが何を意味するのか今後の課題である。

資料の所在

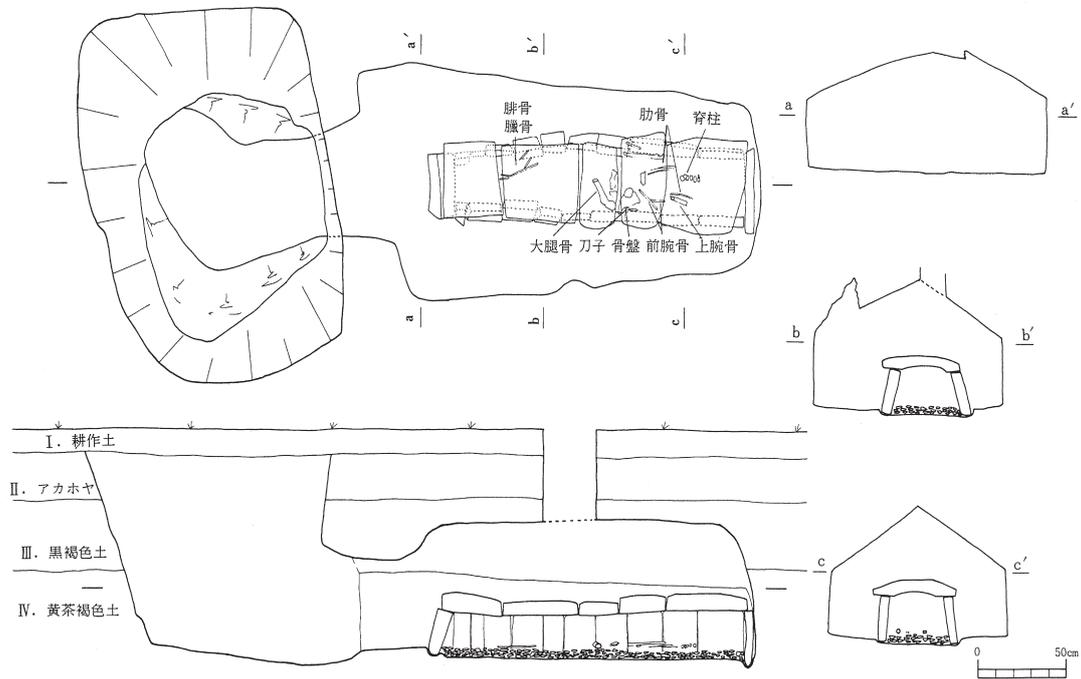
出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

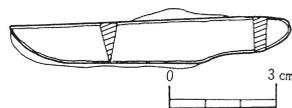
鹿児島県教育委員会1980「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』

13

(中村耕治)



第3図 原田地下式横穴墓実測図



第4図 原田地下式横穴墓副葬品 (刀子)